
好きだった・・・

aya

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きだった・・・

【Nコード】

N0068BA

【作者名】

aya

【あらすじ】

2年前のこと・・・

あれは、もう叶わない約束・・・

そして、俺たちはもう二度と会えない・・・

2年前（前書き）

初の恋愛ものです！

この小説は、ゆずの“桜木町”をもとにした話です。

知っている方いると思いますが、気軽に読んでください。

2年前

朝日がまだ、地平線に出ない頃
工藤邸では、家主の工藤新一がベットから起きて物思いにふけていた。

彼は今日、この国を出るのだ。

彼は、洗面所に行き、顔を洗った後
書斎にある椅子に座り、今までの思い出を思い出していた。

2年前のことを……

彼女、すなわち毛利蘭との思い出を……

<夏>

19歳になった新一は、車の免許を無事取得し、外国にいる両親から贈られてきた車で蘭とドライブをしていた。

「新一、見て！！海だよ！綺麗・・・」

車の助手席から外を見ていた蘭がはしゃいだ声で新一に声をかけた。蘭の目にはコバルトブルー色の海が、太陽の光でキラキラと輝いているのが映っていた。

「車から降りて、海で遊ぶか？」

「え、いいの？ありがとう！！」

新一は、浜の近くに車を止め、車から降りた。蘭も後に続いて降りた。

蘭は、海の中にくるぶしまで入り、水を飛ばして遊んでいた。

新一はその様子を見てほほ笑んだ。

バシヤッ

「うわっ冷てっ！」

「ふふっ」

蘭は、思いつきり新一に水をかけたのだ。

新一が驚いている姿を見て、蘭は楽しくなり、また新一に水をかけた。

新一も負けじと蘭に水をかけた。

「キャッ!!！」

「へっへーんだ！ 冷てえか？」

「~~~~新一！お返しだ~~~~!!！」

そうやって10分くらい水のかけ合いをした。

「蘭、休憩しようぜ！」

「ええ〜体力ないんだ！19歳なのにい〜。」

「ニヤロ・・・」

「なんてね！私も疲れたとこだったんだ。」

二人は、波打ち際で並んで座った。

新一はふと横を見ると、海水で濡れた蘭が太陽の光でいつもより艶やかになっていた。

「……っ!!!!」

新一はそんな蘭を見て、顔を真っ赤にしてしまった。

蘭は、顔を赤くした新一を見て、キョトンとなったがそんな姿さえ愛おしくなりほほ笑んだ。

ほほ笑んだ彼女を見て、新一は蘭を抱きしめた。

“離さない”と暗示しているかのように。

「ちよっ!新一……!!」

「マジでキレーなんだけど。」

「こんな顔、ほかのヤローに見せるんじゃないぞ。」

「う、うん……」

「なあ、蘭。約束していいか？」

「えっ……!どんな約束？」

「来年もまた、ここに一緒に来るっていう約束。」

「……っ!当たり前じゃない……。」

「ふっ・・・あんな約束・・・」

叶わない夜空の星・・・

2年前（後書き）

・・・はい。

ここまで読んでくださった方は分かると思いますが、
恋愛ものはとても苦手です・・・（だったら書くんじゃないよー！）

（殴）

すみません。

街（前書き）

新年あけましておめでとございます。
今年もよろしくお願いします！！

街

ふと気が付くと、もう7時になっていた。

「そろそろを着替えねーとな・・・」

新一は、シャツとジーンズというラフな格好に着替えると
昨日のうちに準備しておいた着替えや、必要なものが入ったバッグ
を持つと家を出た。

街は、学校に登校する学生や、会社に出勤する大人たちであふれか
えっていた。

（もう少し早く家を出ればよかったかな・・・）

そう思ったが、すでに遅かった。

新一のまわりには、女子高生が集まっていた。

「あのお、探偵の工藤新一さんですよ？私、大ファンなんです！サインください！」

「ずるい！！私は、握手してください！」

「メアド交換ってできますか？」

その様子をOLや、（おそらく）退職前であろうつ白髪まじりのおじさんたちが

白けた顔で見ている。

だが、そんな状況でも慌てず新一は

「急いでるんで、道をあけてくれないかな？」

と冷たい声で言った。

本来ならば紳士の新一は女性に対してそんな口調は使わないが、昔のことを思い出させるのか、ついそんな言い方をしてしまった。

「「「す、すいません・・・」「」「」

新一は、少し怯えた表情で道をあけた女子高生に「ゴメン。」と短く謝罪し、その場を離れた。

しばらく歩いていると、女の人にぶつかった。

「ごめんなさい。」

「「「ちら」」」

謝罪をした後、2、3歩歩いて足を止め
新一は、まわりを見渡した。

なぜか、哀しい、虚しい、寂しい気持ちになった。

人も、景色も通り過ぎていく。
もちろん、時間も。

気が付いたときは、なぜか自分だけ置いてけぼりになっていた。

いままでの2年間、ずっとそう感じていた。
でも、“感じていた”じゃなく“そうだった”

いまま、心は置いてけぼり・・・

たぶん、これからも・・・

街（後書き）

・・・なんじゃこれえ!!!

すんごいシリアスになってしまいました。

すいません（大泣）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0068ba/>

好きだった・・・

2012年1月4日05時50分発行